

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会 | Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

<熊に関し間違った考えを啓発し続ける恥すべき北海道新聞>

[I] 2015 年 7 月 10 日夕刊の「今日の話題」と言う記事



熊に GPS を装着し、熊の行動を監視し、各種被害の予防を図ろうと言う内容。特に札幌圏では熊が増加傾向にあり、専門家は「いつ事故が起きても」おかしくない」と警告と言う。

<門崎の見解>

・GPS の装着は、熊を麻酔銃又は檻罠で捕らえ、麻酔し、首に弁当箱程の発信器を一生着ける事である。本来首に無い物をつける事で、精神的肉体的の負担が非常に大きく、これは生物倫理(生物の一員である人が、他種生物に対する

正しき行為)に反する行為である。

・北海道での熊による猟師以外の人身事故は 1970 年から 2015 年の 46 年間に 49 件、年平均 1.09 件である。これも、笛と鉦を持って歩けば、減らせる(対応は当会報 37 号参照)。

・札幌圏で住宅地での出没熊は総て母から自立した満 2 歳未満の若熊で、2 歳未満の野生熊が人を襲った事例は無い。この実態を知らない無知な恥すべき発言であり記事である。

[II] 2015 年 7 月 19 日(日)の「ヒグマ目撃 6 月 200 件」と言う記事

今年の熊の目撃件数は 4 月 65 件、5 月 98 件、6 月 200 件で、目撃場所別では、路上が 41%と、山中 27%、畑 22%を上回っており、市街地への出没が見立つ。其の原因を北大の野生動物学の坪田教授は、猟師の減少などで、熊の個体数が増え、増えた事で、山での餌不足が生じ、その分生息域が増大し、人里に出没する可能性が高くなるとのコメント。

<門崎の見解>

・坪田氏は(捕殺数の増減の有無を故意に言っていないが)、当然、猟師の減少で捕獲数

が減ったと言う意味であろう。しかし、左下に掲載の 1986 年～2013 年迄の 28 年間の熊の年度別捕獲表を見れば一目瞭然だが、熊の捕殺頭数は減っておらず、3 年単位で見れば、逆に捕殺数が年々増えているのが現実で、猟師が減少したから、熊が増え出没が増えたと言う論理は当たらない(道新の記者はそれが分らないのか)。

- ・ 路上での目撃が 41% と言うのは、市街地の路上なのか、山林を貫く路上での目撃なのかの区別が重要である。熊が古来から生活地として利用している道内の多くの山林の中を道路が貫き、山林を分断している現状では、熊が道路を横断するのは必然的な事であり、これを問題視する事は誤りで当然の事象と看取すべきである。
- ・ また、目撃情報の多少は、携帯電話が普及した事と熊問題を取り上げる報道の多少で変動するものである。
- ・ 山中での目撃率が 27% と言う数値が高くなるような自然地での林野行政に励んで貰いたいものである。

年度別熊捕殺頭数

	年度	捕獲頭数		
		狩猟	有害駆除	計
1986	S61	156	289	445
	S62	78	139	217
	S63	146	143	289
1987	H1	76	108	184
	H2	132	89	221
	H3	173	94	267
1990	H4	98	124	222
	H5	118	169	287
	H6	72	105	177
1991	H7	111	122	233
	H8	126	210	336
	H9	94	112	206
1999	H10	141	158	299
	H11	132	207	339
	H12	119	184	303
2000	H13	154	310	464
	H14	109	189	298
	H15	95	306	401
	H16	55	299	354
	H17	140	447	587
	H18	91	339	430
	H19	61	375	436
	H20	61	365	426
	H21	82	567	649
2009	H22	68	493	561
2010	H23	138	688	826
2011	H24	77	622	699
	H25	46	566	612
	H26	—	—	—

会計年度である 出典：道庁資料

ハンター減り個体数増か

道庁によると、今年の目撃件数は4月65件、5月98件、6月の急増が原因で、上半期の件数は2005年(166件)から右肩下がりでも増え続けており、今年は昨年の300件に迫った。

道庁によると、今年、クマの出没は5月に入ってから急増している。1日はタマ市のメロン畑のベニハウスが襲われ、メロン10個が食い荒らされる被害があったほか、釧路管内今金町の牧草地で4日、乳牛1頭が死んでいるのが見つかった。いずれもクマによる被害とされている。

北大大学院獣医学研究科の岡田聖典教授(野生動物学)は「高齢化によるハンターの減少などにより、クマの個体数が増加し、餌不足から生息域が拡大している」と分析する。特に7月以降は、餌から自立したばかりの若いクマの活動が活発になる。ポングリなどクマが好む餌が少ないため、人達に出会う可能性が高くなるという。

道庁は「人間の物を食べたクマは捕殺し、何頭も山から下りて来る危険性がある」とし、①キャンプ地などへ食物類を持ち込まない②山中に入る時は、ランオア等の目・クマに人間の気配を知らせる「クマの注意笛」を携帯している。

北海道新聞

2015年(平成27年)7月19日(日曜日)

ヒグマ目撃 6月200件

道内での目撃、クマの目撃件数が急増している。道庁によると、6月200件を上回り、4月171件、5月198件、6月200件と過去10年で最も多い。上半期(1～6月)の件数も200件に達し、昨年に次いで2番目に多い380件となった。専門家はハンターの減少などにより、クマの個体数が増えたと指摘。例年、若いクマが繁殖するため、8月の件数がピークになると見られる。道庁は注意を呼びかけている。

月間数 10年で最多

